

キトラ古墳石室の考古学的調査について

調査機関：奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、
明日香村教育委員会

調査期間：平成 25 年 2 月 18 日～27 日

○調査の概要

平成 16 年 5 月に盗掘孔に設置された石室進入装置を取り外し、装置により覆われていた盗掘孔周囲を中心に、考古学的な調査及び記録を実施した。

○調査成果

①天井石・西壁石・南壁石相互の合欠の形状や状態を確認

石室南側にある石材の合欠の形状や石室構造の精査を行い、これまでの認識と相違がないことを確認した。それらを実測・計測作業により記録した。

②盗掘孔の周囲を中心に写真撮影・3D測量を実施

これまで詳細な写真やデジタル記録のなかった盗掘孔周囲に関し、写真撮影と3D測量を行った。当該調査によって高精細な画像による記録を取得した。

③拓本により、天井石・南壁石南面の加工痕跡を記録

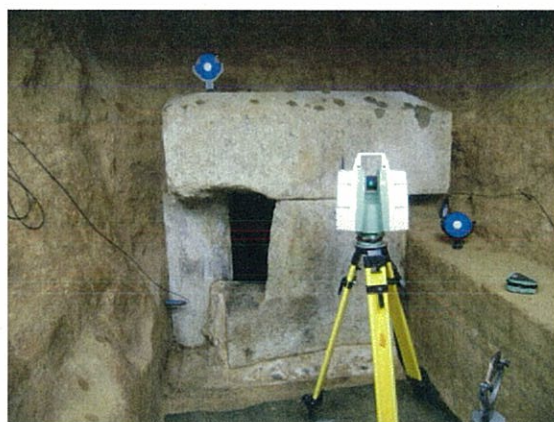
天井石と南壁石の南面において、進入装置により隠れていた部分を中心に、拓本による加工痕跡の記録作業を実施した。昨年度(平成 23 年度)調査(別添参考報告を参照。)で行ったものとあわせ、天井石・南壁石南面全体の状態を記録した。

④朱線を新たに 51 箇所を確認

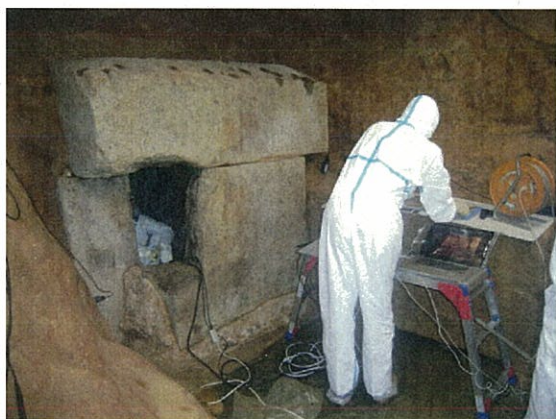
石室内の朱線を再確認したところ、昨年度(平成 23 年度)調査の時より石室内の状態が良好であったため、新たに 51 箇所朱線を確認した。これにより、朱線の総数は 117 箇所確認した(最長のものは 41.2 cm、最短のものは 1 mm)。同一直線上にのるものを 1 本として算出すると、確認できた朱線は 24 本分になる。



石室進入装置の取外作業



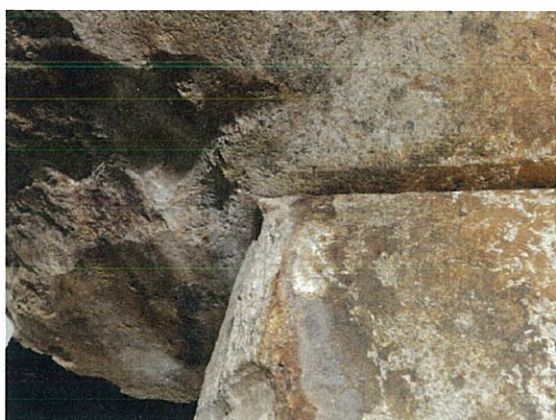
3 D 測量



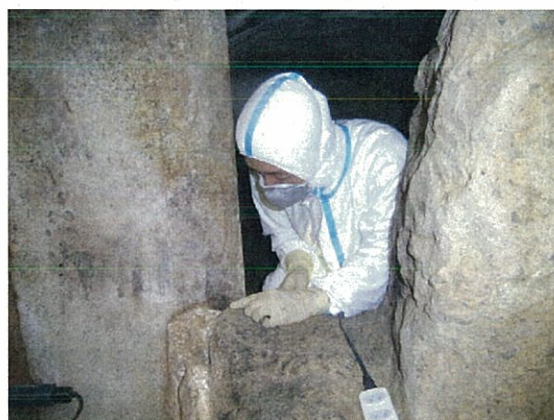
写真撮影風景



拓本作業 (南壁石南面部分)



天井石南西隅の朱線
(写真左側が盗掘孔部分)



合欠形状の計測作業

キトラ古墳石室内の考古学的調査について（報告）

調査機関： 奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、
明日香村教育委員会

調査期間： 平成 23 年 6 月 13 日～24 日

○調査の概要

床面に残存する漆喰上の精査、壁画剥ぎ取り後の石材表面及び石室構造に関する考古学的な調査等を実施した。

○調査成果

①床面漆喰上に棺台とみられる痕跡を確認

精査の結果、床面の東西両端に幅約 18cm、北端に幅約 20 cmの漆喰の残存が良好な部分があり、その内側には他よりも白色を呈する漆喰が帯状（幅約 3 cm）にのびる状況を確認した。高松塚古墳の調査でも確認されている棺台の痕跡とみられる。棺台の痕跡が確認できたのは北辺、東辺、西辺の 3 辺であり、南辺は漆喰の残存状況が悪く、確実な位置を特定できなかった。

痕跡の東西幅は 68 cm、南北長は西辺で 137.5 cmが残存する。キトラ古墳石室床面は奥行 239cm、幅 104cm を測るが、棺台はそのほぼ中央に置かれていたとみられる。南辺が北辺と対照の位置にあったと想定すると、棺台の長さは 200cm 前後に復元できる。キトラ古墳における棺台の痕跡は、平成 16 年に実施された石室内発掘調査後に撮影したフォトマップを通してその存在を推測してきたが、今回の精査によりそれとほぼ同様の位置で痕跡が明瞭に残存する状況が明らかになった。

高松塚古墳の棺台痕跡は、幅 66 cm、長さ 217 cmと想定されている。高松塚古墳では棺自体の大きさが幅 58cm、長さ 199.5cm であることが判明しており、床面漆喰上で検出された痕跡が棺の大きさを上回ることから棺台の痕跡と特定された。キトラ古墳の場合、棺の大きさは不明であるが、床面漆喰上の痕跡の幅は高松塚古墳の棺台痕跡の数値と近似する。また、平成 20 年

刊行の報告書では、石室内から出土した漆塗木棺片に水銀朱仕上げのものと、黒漆塗仕上げの2者が存在し、後者が棺台の破片にあたる可能性が指摘されてきた。したがって、今回確認した長方形の痕跡も棺台のものであるとみられる。

②石材表面で朱線を新たに14本確認

今回の調査で確認できた朱線は計20本で、内訳は床面3本、天井6本、東壁7本、南壁1本、西壁3本である。これまで判明していたものは、床面1本、天井5本の計6本であり、新たに14本の朱線が確認されたことになる。朱線は石材の外周縁にみられるものが多く、主に石材を加工する際の基準線として利用されたものと考えられる。

③南端の天井石が南にむかって傾く状況を確認

石室の入口部を閉塞する南壁石は、他の壁石よりも高さが2cmほど低く加工されていることが判明した。これは石室の開閉を容易にするための意図的な工夫と考えられるが、その結果、南端の天井石（天井石1）は南に向かって傾斜し、南端の天井石（天井石1）とその北側の天井石（天井石2）の継ぎ目には1cmほどの段差が生じている状況が明らかになった。この南端の天井石の傾斜は、築造当初からのものと考えられる。



作業風景（床面の精査）



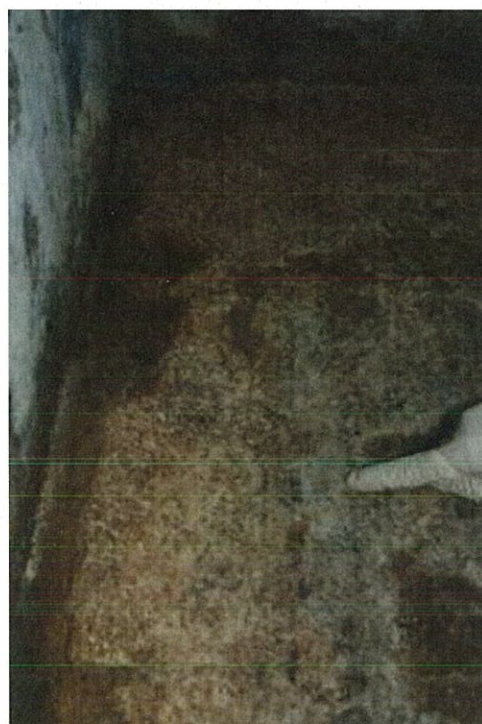
作業風景（記録作業）



天井石 1 の朱線(下から見上げる・右が西)



床面の棺台痕跡（南から）



棺台の痕跡（西辺・南から）